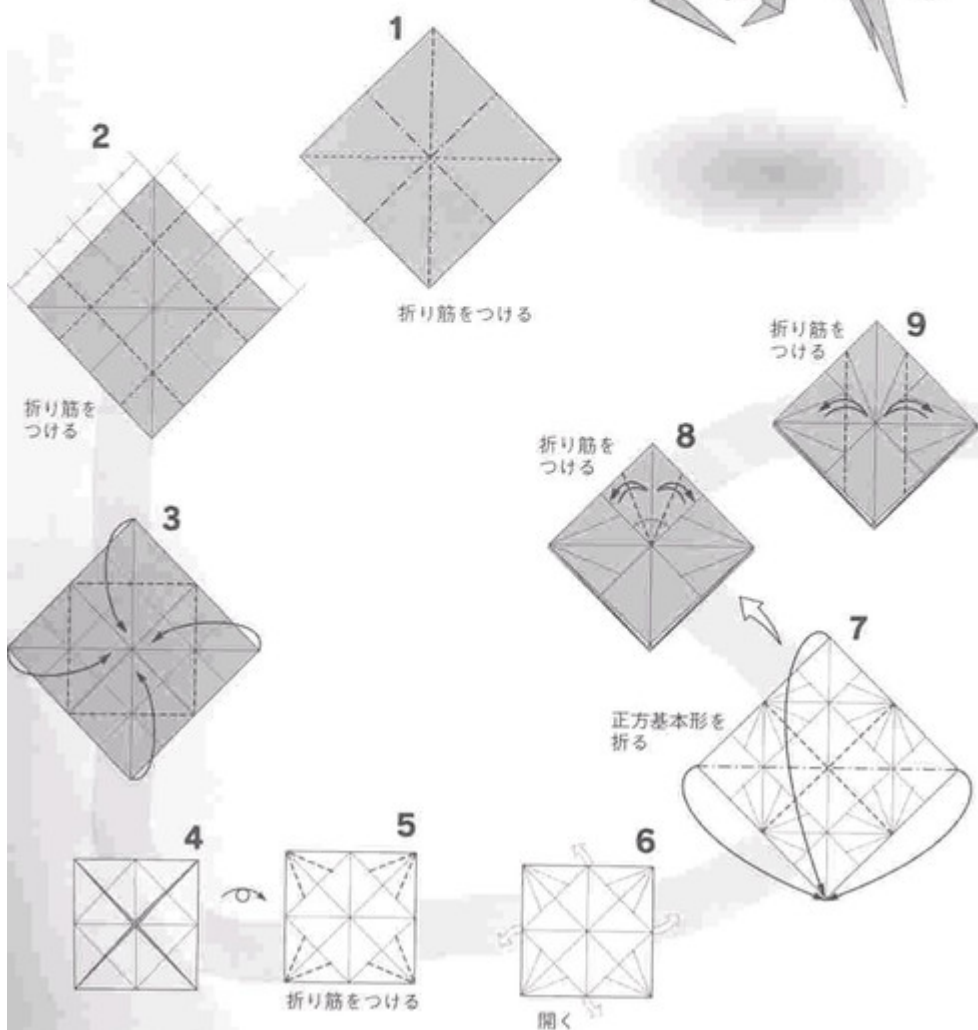


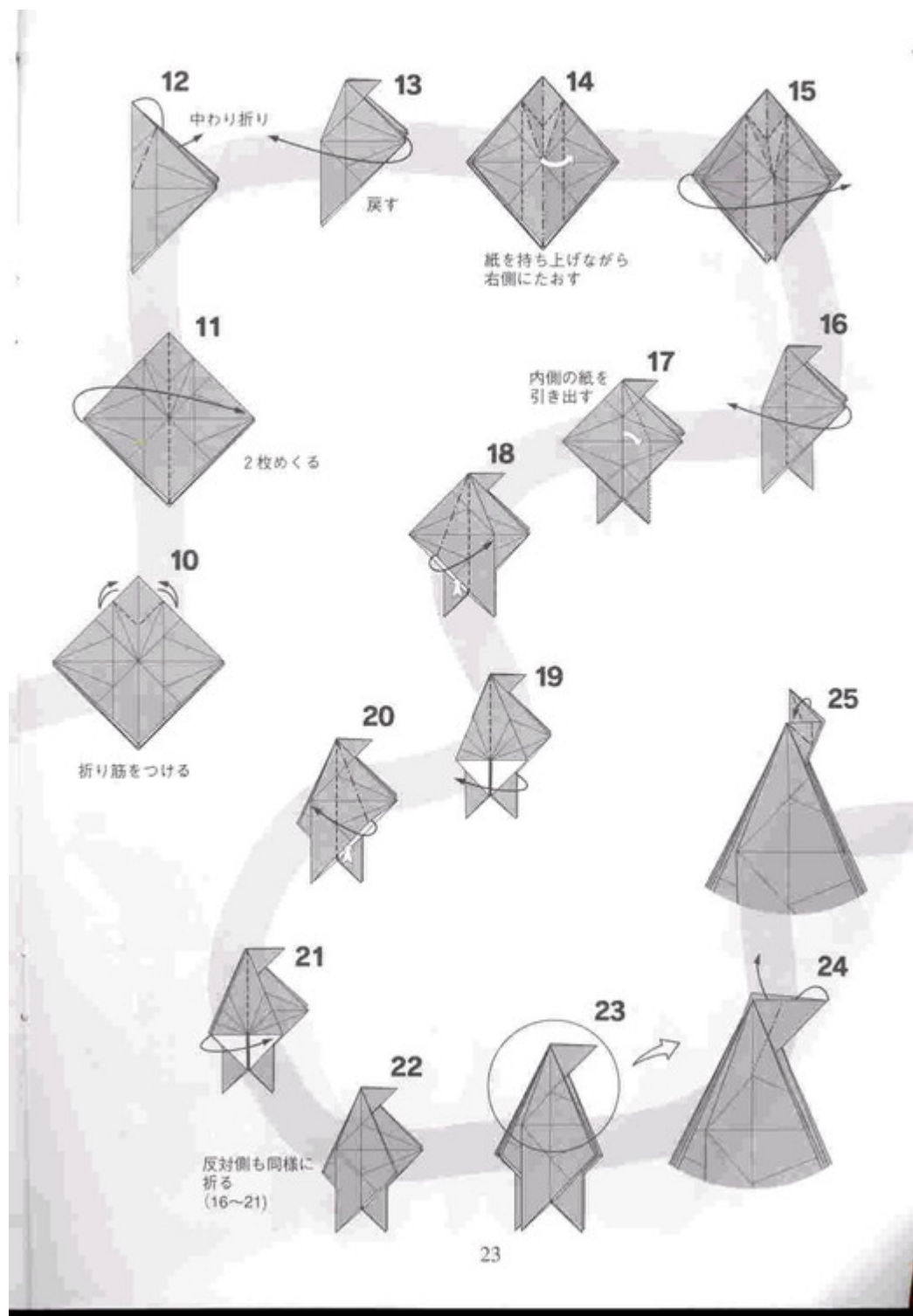
ペガサスの騎士

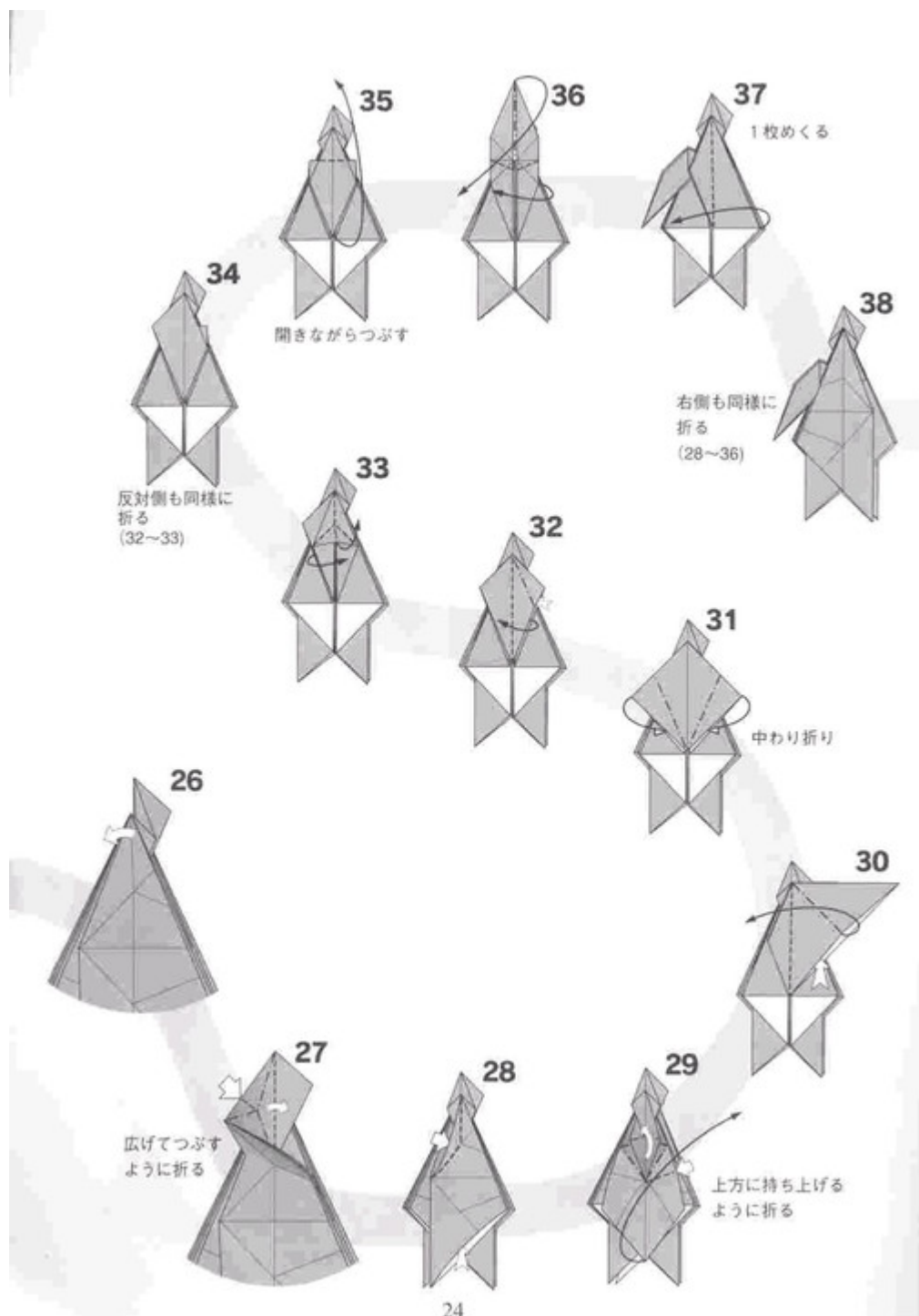
A Knight on Pegasus

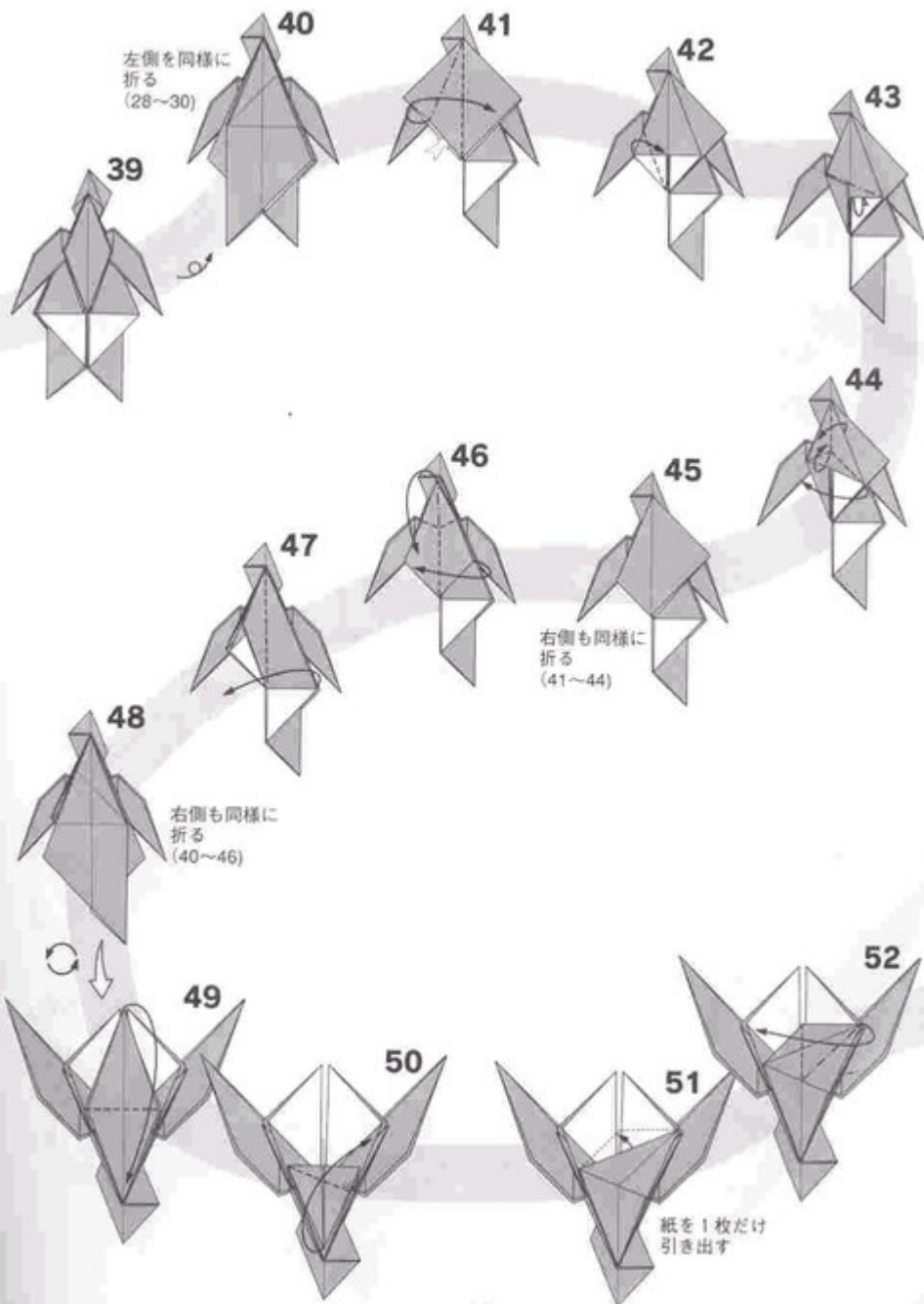
作/図 宮島 登

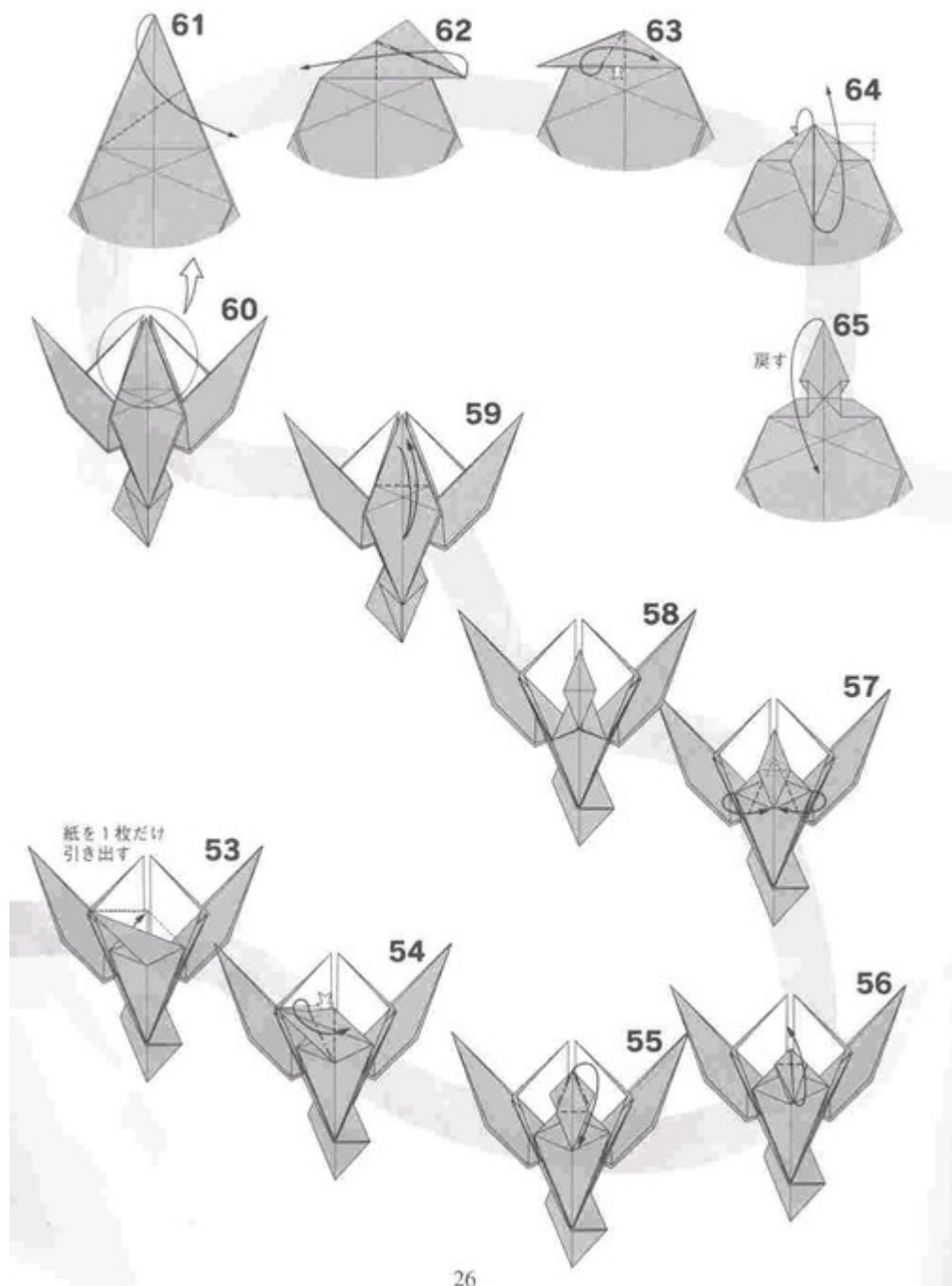
Design & Diagrams by Miyajima Noboru

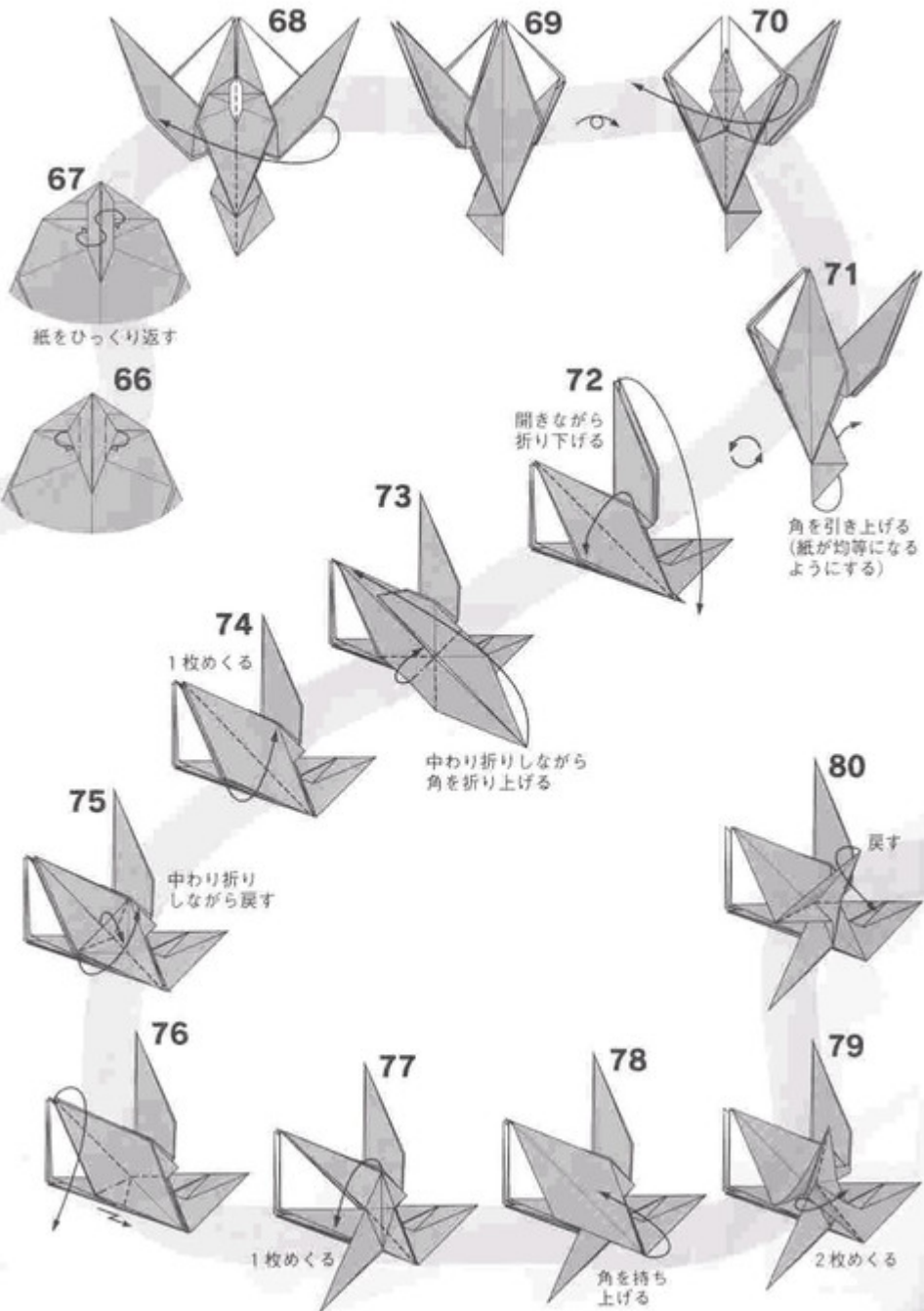












紙をひっくり返す

開きながら
折り下げる

角を引き上げる
(紙が均等になる
ようにする)

1枚めくる

中わり折りしながら
角を折り上げる

中わり折り
しながら戻す

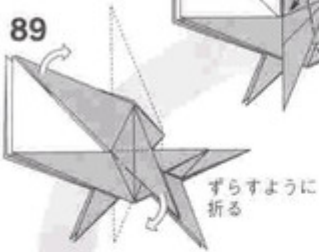
戻す

1枚めくる

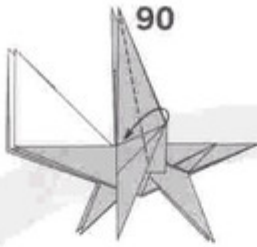
角を持ち
上げる

2枚めくる

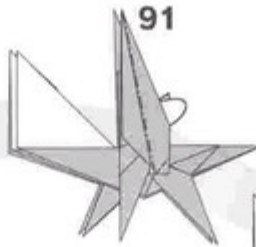
89



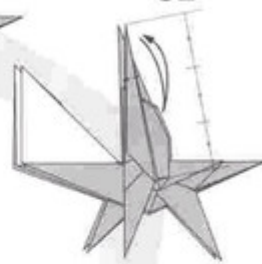
90



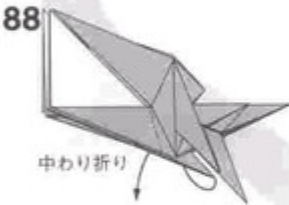
91



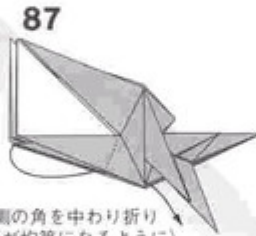
92



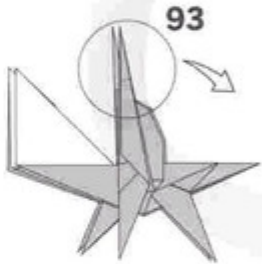
88



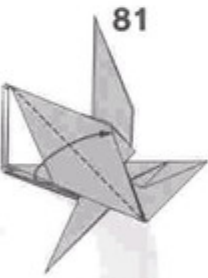
87



93

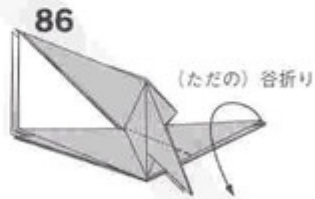


81



内側の角を中わり折り
(紙が均等になるように)

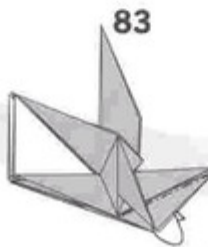
86



82

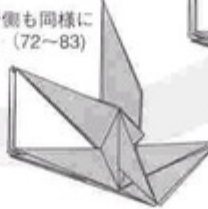


83

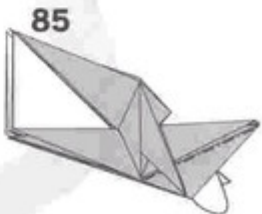


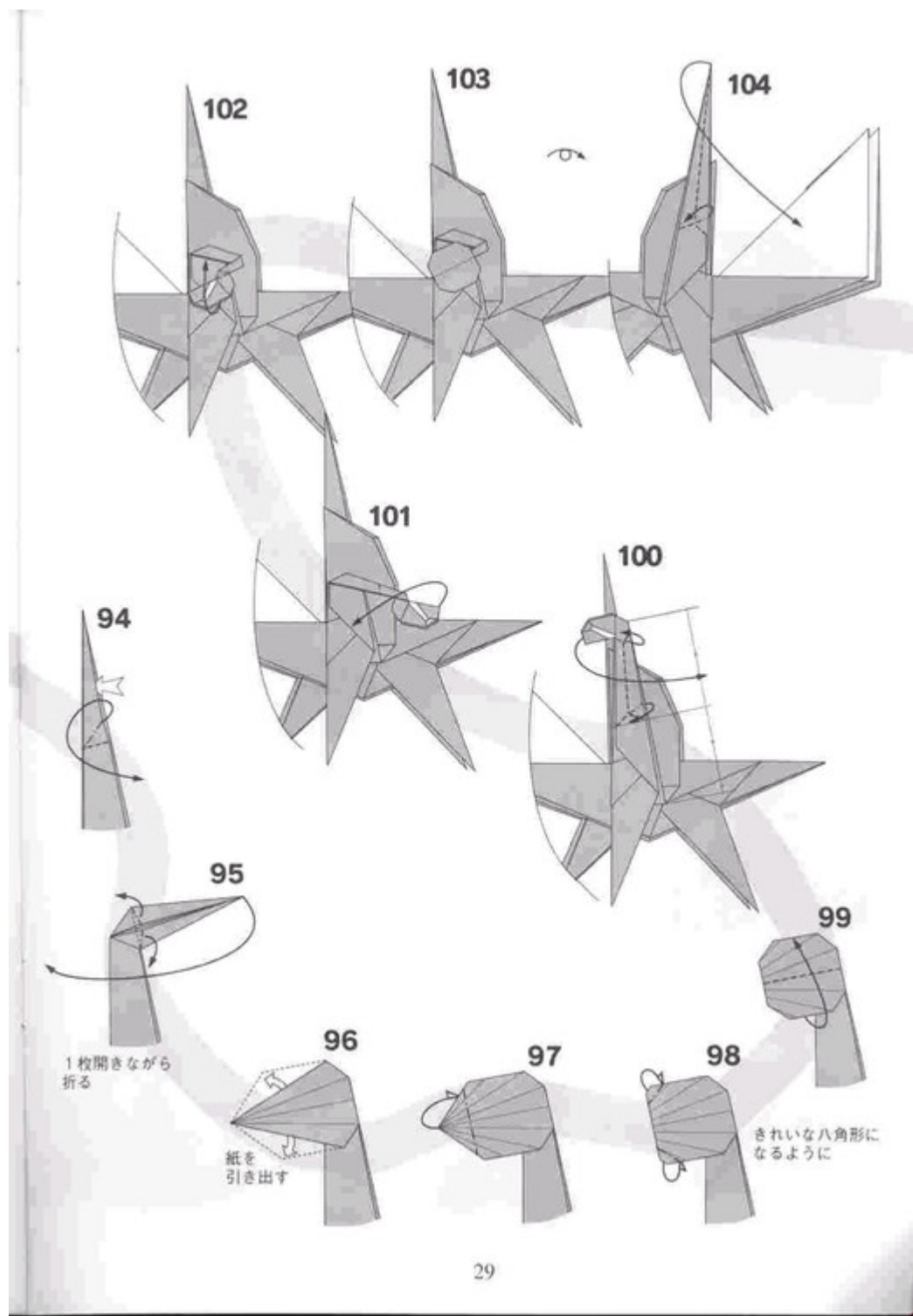
84

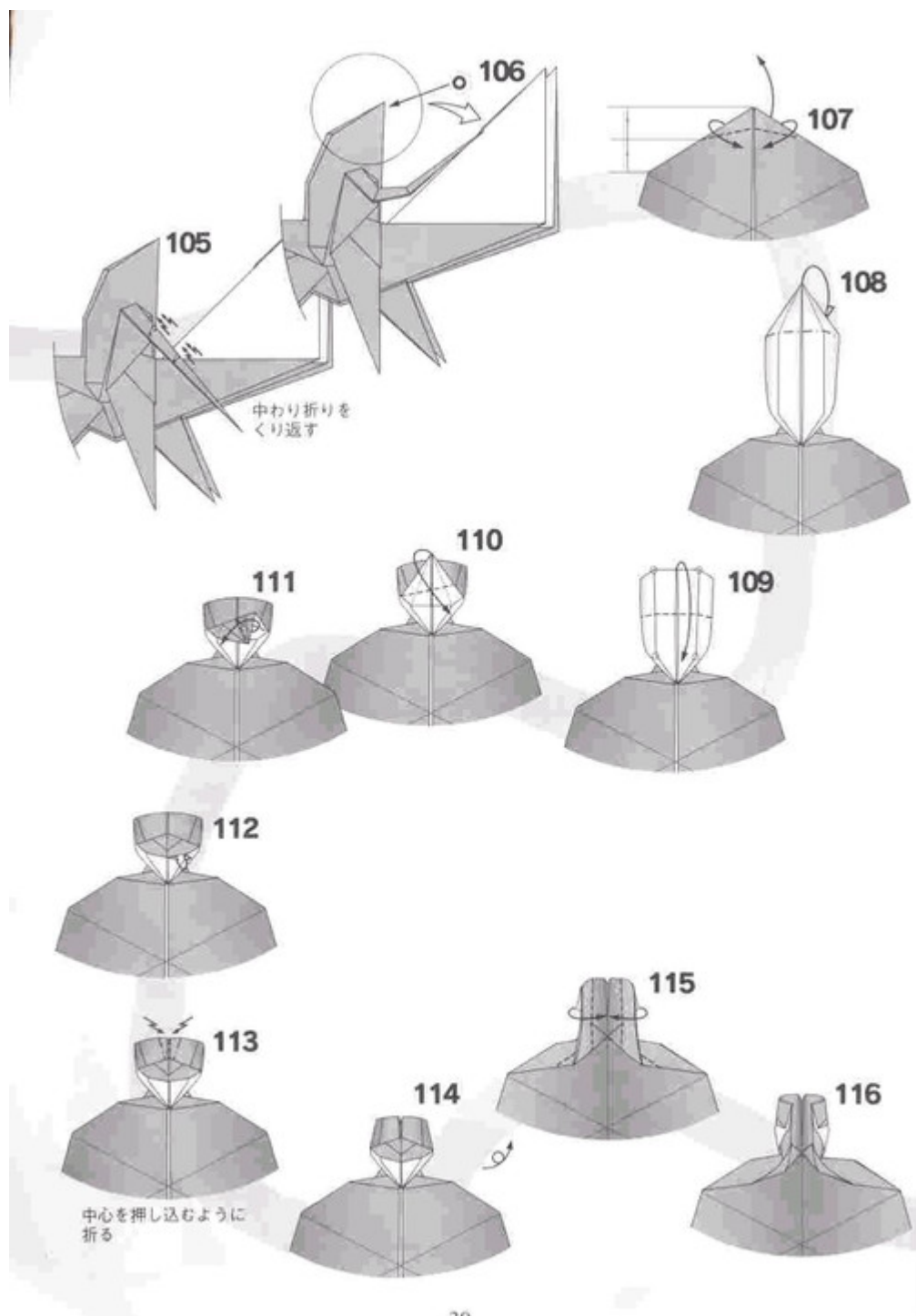
反対側も同様に折る (72~83)

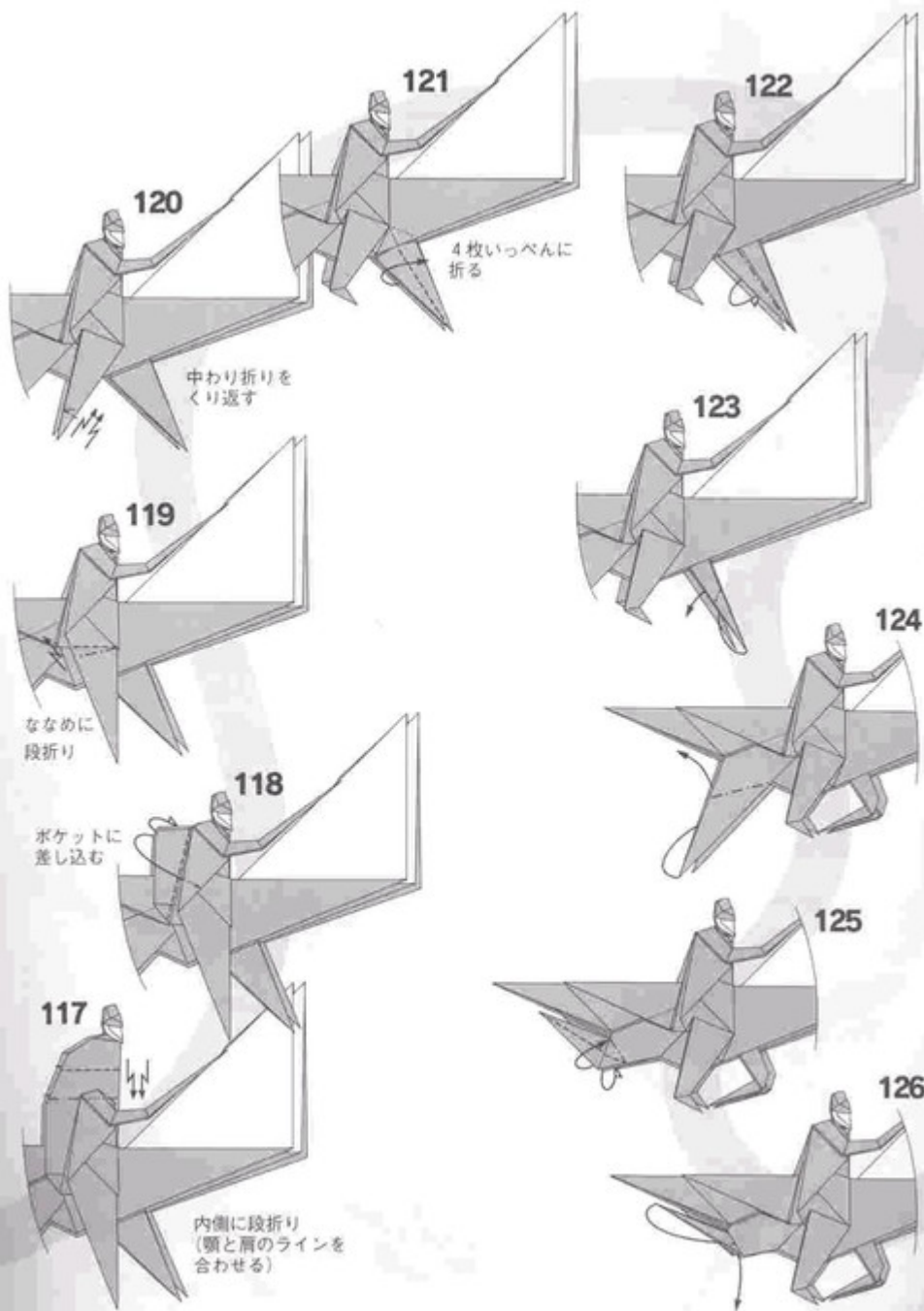


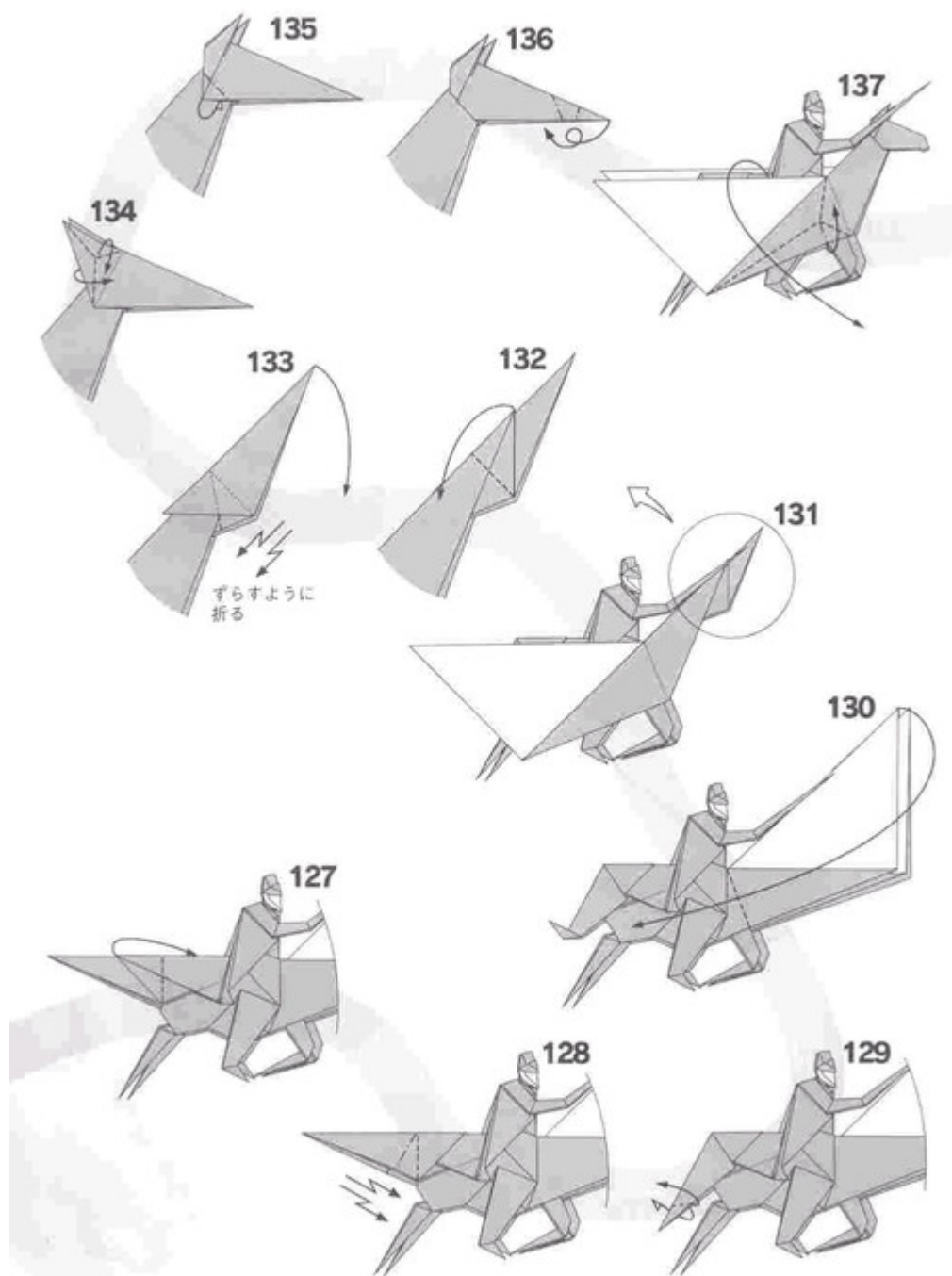
85

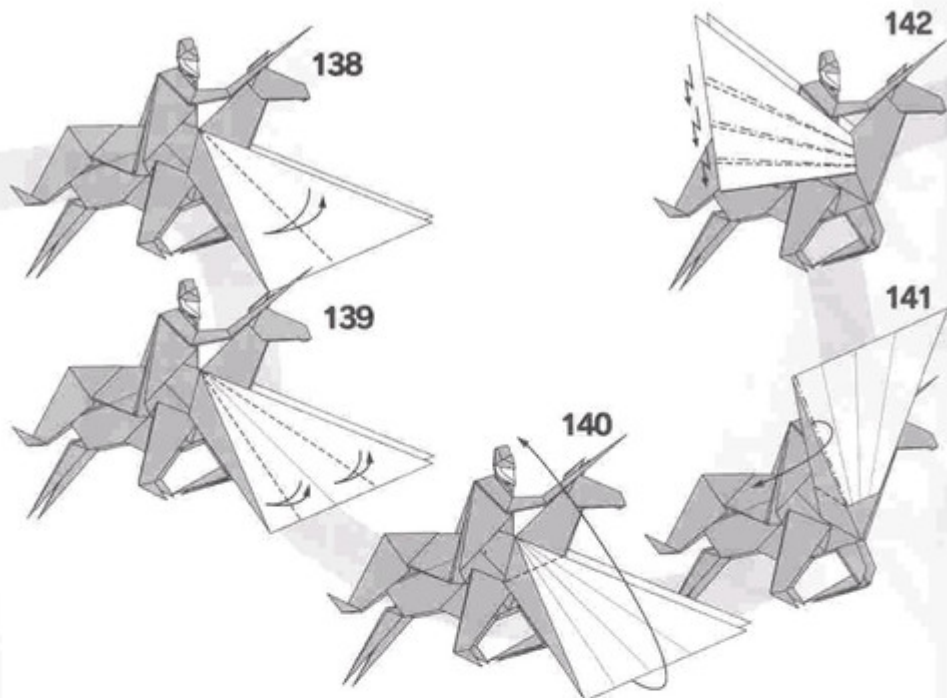












おりすじ

Orisuzi ("Fold-Creases")

Memories of My School Excursion 修学旅行の思い出

Hattori Yoshiaki
服部吉晃

それは中学校3年生のときの修学旅行の班別自由行動の見学地を決めるときのことだった。

「行動範囲は山手線の内側です。基本的に自由です。」と担任の先生から説明があった。これを聞いた僕はすぐにおりがみはうすが頭に浮かんだ。5月19日。水曜日だ。「行ける…。」こうして班長でないにもかかわらず、みんなの反対を押し退け、強引に計画を立てた。なんと担任の先生のO.K.も得た。日ごらのクラス内での折紙活動が報われたように思われた。

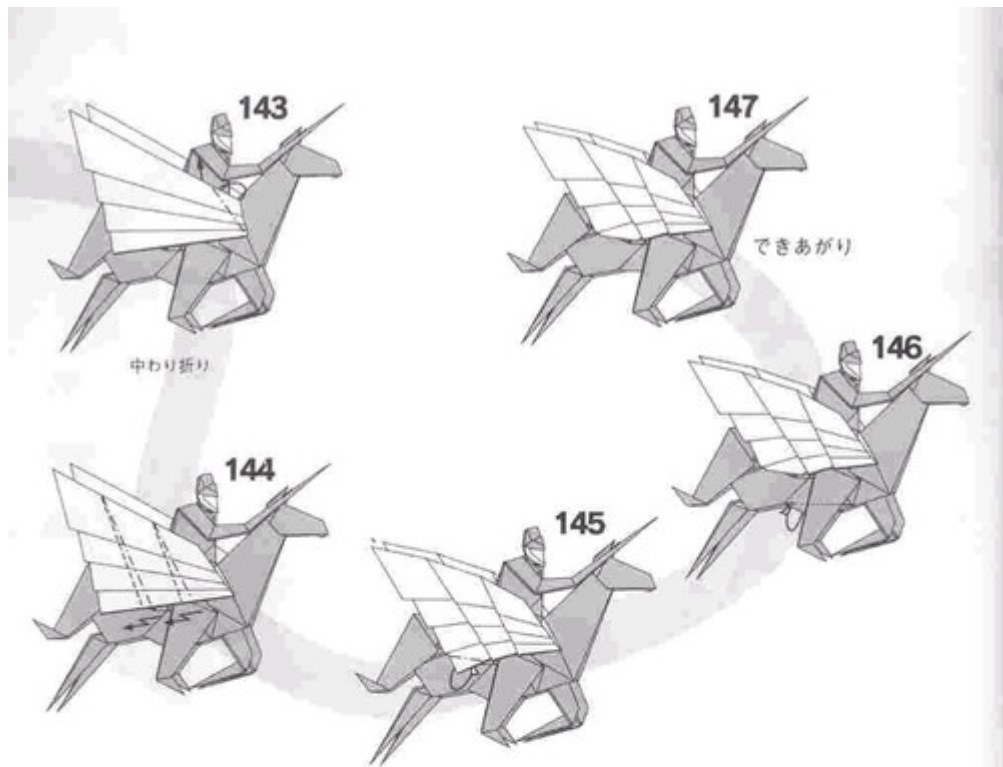
そして当日の班別行動の日がやってきた。計画は立てたものの、はうすに近づけば近づくと他の班員の目は冷

ややかなものになっていったが、このとき僕自信も期待と不安が交錯していた。なぜならこのとき僕は探偵用新聞をとっていたくらいで、趣味が折紙という人との接触はゼロだったのだ。当然コンベンションにも例会にも参加したこともなく、山口さんと会うのも初めてなのだ。「突然行って相手にしてもらえるのだろうか。はうすはどのようなところなのだろうか。」そんなことを思いながらはうすについた。

はうすの入り口には作品が飾られていて異様な雰囲気をかもしだしていた。そのマニアックな光景に他の班員は耐えられなかったのだろうか。あきれ果てた様子ではうすの前のコンビニへ立ち去ってしまった。なんとか友達一人をひっぱりは

うすへ入った。最初は会話もなく少し気まずかったが山口さんが僕たちに声をかけてくれて、会話が弾んだ。それからしばらくしてコンビニへ行っていた班員が戻ってきて、入り口に立っていた。決して中に入ろうとはしない。結局班員との折り合いが悪くなりはうすを出ることになった。20分ほどだっただろうか。予定では40分いるはずだったが、本当に短く感じられた。その後、満足そうな顔をしていたのは僕だけだったのは言うまでもない。

というわけで他の5人の班員はどう思っているかわからないが、少なくとも僕だけは中学校の修学旅行のいい思い出になったのだった。



折紙三昧

Origami-Zansai (This Origami and That)

満足解

A Practical Solution

折紙創作における「見立て」の役割について考えるようになって、これって認知心理学と呼ばれる領域の問題なのかなと思ひ、何となくその手の言葉が目につくようになりました。最近、ふと目にした新聞の経済コラム(4月22日、日経新聞 神戸大学金井教授)に「適応的動機行動モデル」というものについてやさしい紹介をみつけました。「人は現状に不満である限り、他の代替案を順繰りに探索する」というアイデアを出発点に、「探索は不満が解消するまで続き、いったん満足といえる案にたどりつけばよりよい選択肢が世の中に存在しても、もうそこまでは探さない」という人の意志決定を説明するモデルのひとつなのだそうです。経済コラ

ムなので企業活動や就職活動など経済活動を中心に、人が情報処理能力や認知能力の制約の中で、いかんかのように行動しているかの例があげられていました。「妥協」というあまり印象の良いくない言葉も思い起こされそうなのですが、この「適応的動機行動モデル」では逐次的な探索によって得られる解を「満足解」と呼ぶのだそうで、これは随分ありがたみが違いますね。「不満→逐次探索による解答探し」から想起される一現状に不満である限り、変化の中にしかより良い答え(もちろん、より悪いもあるわけですが)は無い—という道説は、なかなかの人生訓でもあります。

さて、折紙の創作において、面や稜線の手がかりが意図的に成されたわけでは

なく、偶然や幾何学的制約の上に成り立った造形の中に時たま現れる「見立て」という認知は、まさに「満足解」と呼ぶにふさわしいものではないでしょうか。もともと「満足解」は「最適解」ではないので、学習や心情の変化がきっかけとなって再び新しい「満足解」を求めて探索が開始されるのでしょう。

55号から雑誌化した「折紙探偵団」が4期目(新聞から数えて13期目)となります。今期もご購読いただきました皆さまには心より感謝申し上げます。今後ともご支援いただきますようお願いいたします。

西川誠司 Nishikawa Seiji
日本折紙学会 評議員代表